

法花経を授かりし平泉の女

—「撰集抄」卷二の第六話をめぐって—

稲田利徳

はじめに

岩波文庫に翻刻されたのを契機として「撰集抄」の研究がにわかに活発化している。

西行仮托という烙印を押された、この一種の仏教説話集は、西行の実像をキヤッチする書としてではなく、仮托を仮托として認められた上で、説話文学史、あるいは中世文学史上の位置付けが試みられている。

西尾光一氏は、「撰集抄」に説話における説話的発想法と隨筆における自照的発想法の奇妙な混合をみてとられ、「枕草子」から「徒然草」への推移は、「撰集抄」その他の仏教説話集を媒介とすることなしには考えられないのではないかと示唆され、また伊藤博之氏は「撰集抄」に威儀を正した唱導僧に、かえって道念を覚えなない批判的な目と心をもった語り手をみてとられ、その遁世思想は、院

政期に顕著に見られる遁世歌人や遁栖的文人層の意識構造の直接の反映と考えられるなど、^(注2)各々卓見を示されている。

さらに最近では、小島孝之氏の一連の研究や木下實一氏^(注3)などの諸論にみられるような、一話一話の分析から「撰集抄」の形成を把握しようとする論もあらわれている。

説話文学とは何かという根本な概念規定を行うことは重要であるが、その概念規定が、種々の形体を内包する説話文学群の研究を逆に規定する方向におちいってはならない。

説話文学研究にあつては、かかる大局的な視点を常に念頭におきながらも、一つの説話集、あるいは一つの説話の形成や特質を分析することも必要であろう。

「撰集抄」は、一応、仏教説話集と呼ばれているが、その内容は他の仏教説話集と比較してみても、かなり趣を異にした形式や発想を具えており、伝承性とともな、作者の創作説話や説話評論を多分に含んでいる。そういった性格の一端を具体的にさぐるため、ここでは卷二の第六話をとりあげ、その伝承説話の原話を推測し、

それを「撰集抄」がどのように受けとめて定着させているかをたどつてみたい。

最初に卷二の第六話を岩波文庫（底本は近衛本）で紹介する。この話は略本系にはみえない。広本、略本の問題に關しての議論もなされてきたが、^(注5)ここではたちらない。

全体を私なりに幾段落に分けてみる。

第六話 奥州平泉郡女法花經授カ 事

過ぎぬる比、陸奥平泉の郡、^イ例と云里に、しばし住み侍りしとき、そのあたりみ侍りしに、さか柴山といふ山あり。木の生ひたる有様、岩のすがた、水の流れたる體、繪にかくとも筆もおよびがたき程に見え侍り。里をはなれ十餘町もや侍りけん。あちこち徘徊し侍るに、川ばたに高さ一丈あまりなる石塔をたてたり。くぎぬきしまはし、草はらひなどして、めでたく見え侍りしかば、是はいかなる事にかと尋ね侍りしに（A）

ここまでは、作者が陸奥の平泉の郡にでかけたとき「さか柴山」に一つの石塔を見つけたし、土地のものにその由来を聞き出そうとする部分である。一応、作者が実際に現地に足を踏み入れ、直接聞いたスタイルをとる。次には、

ある人の申ししは、「中比、この里に猛將侍り。其むすめにありける物、法花經をよみたがり侍りけるが、教ゆべき物なしとて、朝夕なき歎きてすぎ侍りけるに、あるとき、天井のうへに聲ありて云やう『なんぢ經を求めて前に置け。我こゝにて教

へむ』と聞ゆ。あやしく思ひながら、經をえて前に置き侍るに、天井のうへにて、床しき聲にて教へ侍り。八日といふに皆ならひ果てぬ。そのとき此むすめ『いかなるわざならん』と言へども、あやしくおぼえて、天井を見侍る（ハ）。しろくされ、苔おひ

たるかりべに、舌のいきたる人のごとくなるあり。此白骨の教へ侍るにこそとおもひ驚きて、『こは誰にてかましますらん』と、あながちに尋ねきこゆるとき『我は是、昔延曆寺の住僧（イ）慈恵大師のかうべなり。なんぢが心ざしを感じて、きたりて教へ侍る。又、いそぎ我をさか柴山におくれ』と侍りければ、あは

れにかたじけなき事、たとふべき物なんなくおぼえて、なくく此山に納めて、かたのごとく塔婆なんどし侍り。^{（イ）}此比返も山中に置き御經の聲する事侍りき。扱、此女は尼になりて、此中に庵むすびて、おもひすまして侍りしが、この二十餘年のさきに往生して侍るなり。その庵のかたち今にあり。見よ。』と申侍りしかば、（B）

この(B)の部分は、石塔の由来を里人の口を通して筆録している。この話は後述するように、種々の観点からみて、筆者の創作説話とは考えられず、ここに語られるような原話があったものとみたい。次に作者はその話を聞き、

かの人とともなひ、山の奥にいりて見るに、口三間なる屋の、かみさびて、かたばかり残りしかば、かきくらさるゝ心地して、いまさら物も覺えず侍りき。^{（C）}

と、実際にその跡をみて、話の由来とかさねて感涙している。ここまてが作者の仄聞した説話の紹介であるが、このあとにいわゆる作者の意見をもりこんだ説話評論が続き、この話の受けとめか

たがしめされる。

かゝるさま、げにありがたく侍りき。まづ御經ならふべき人もなき邊王の境にうまれたる女の身にて、あけくれ御經をよみ奉らまほしく覺えて、寝てもさめても、此事をのみ歎きををりけん、心の中の貴さは、つたなき筆にはつくしがたく侍り。しかればこそ、慈惠大師の白骨の現れて、さづけ給ひけめと、かたじけなく侍り。(D)

地方の女が懸命に法花經をならったことへの作者の感嘆である。それに続き、

唐のむかしこそ、まづしき男の經を得よまざるとして、おもひ歎き侍りけるに、いつくの物ともなくて、みめよき女のきたりて妻となりて、一部さづけ終りて、後には観音とあらはれて、失せ給へりきと、秦の『明記』にのせて侍れと思ひいだされて、くりかへし貴く侍り。(E)

と、唐の国の類話を紹介する。

又、上代はざる例あまた侍れど、世くだりては、げにも覺えぬわざなり。又、さまかへて思ひすまして侍りけん、ことにうらやましくも侍り。今はいづれの浄土にか生れぬらんと、かへす床しく思ひやられ侍るぞや。われらがなまじひに家を出でて、衣はそめぬれど、はかぐしき信心をおこさず、み山に思ひすます事もなくて、年のいたづらにたけぬる、そゞろに悲しく侍り。(F)

ここでは、女人の出家遁世の堅固さをたたえ、現在の自分の態度と比較して、その修行の徹底せざるを歎く。自照的な方面に筆をはせている点が注意される。

さても、慈惠大師の、遠国の佛法まれなるさか柴山に跡をたれて、無佛世界の衆生を度したまはんとかや。御經の音のきこゆなるは、是にもなほおどろかぬ心どもにて、殺生鬪諍のさかりなる里にて侍る悲しさよと思ふにつけても、何として浮むべき衆生どもと覺えて、そゞろに歎かしく侍り。(G)

作者の視点は、さらに慈惠大師の跡をたれた里であるにもかかわらず、変らず殺生鬪諍をくりかえす衆生を見て嘆息をもらす。

なほ、此女の名字もしらまほしく、その姓その流れも尋ねたく、年月もかんがへたく侍しかども、つまびらかに知りたる人なくて、しるすにおよび侍らず。此所はかやうの事、むげになさけなき里にて、二十餘廻のさきの不思議をも、たしかに知らず侍り。あはれ、その弟なんと云人もながらへてもや侍らんと、尋ねあはまほしく侍り。(H)

作者はさらに、この女人の名字や姓を知りたく思うが詳らかに出来ないとし、加えて、わずか二十数年前にあった不思議な出来事にも無関心である里人への批判を記しながらこの話を閉じる。

以上、各段階に区分し、若干のコメントを加えながら「奥州平泉郡女人法花經授事」を紹介してみた。

二

この話は、西行の陸奥の旅を念頭において仮托されている。西行は少なくとも二度陸奥旅行を行っており、初度は久安三年(一一四七)三十歳頃、二度目は文治二年(一一八六)であると推測されている。

その際、平泉を訪れたことは「山家集」に

十月十二日、ひらいづみにまかりつきたりけるに、ゆきふりあらはげしく、ことのほかにあれたりけり、いつしか衣河みまほしくて、まかりむかひてみけり、かはのきしにつきて、衣河の城しまはしたる、ことがらやうかはりて、ものをみる心ちしけり、みぎはこほりて、とりわきさへければ

とりわきて心もしみてさそわたる衣河みにきたるけふしも

（『私家集大成中世Ⅰ』一一三）

とあり、また「西行上人歌集」にも

奈良の僧、とがのこによりて、あまた陸奥国へつかはされしに、中尊と申所にまかりあひて、都の物語すれば、涙ながす、いと哀なり、かゝることはかたきことなり、命あらは物がたりにもせんと申て、遠国述懐と申ことをよみ侍しに

涙をば衣川にぞながしつるふるきみやことおもひ出つゝ

（四五二）

と詠じた記事があり、仮托ではあるが、西行の足跡と一致する。

「撰集抄」では、先の巻二の第六話のほか、陸奥に取材したものは、巻九の第十一話「寛英僧都事」だけで意外と少ない。

まず、話のタイトルから検討してみる。

岩波文庫の底本は近衛家本であるが、これには「奥州平泉郡女人法花經授事」となっているが、他の諸本ではまちまちである。^{（注7）}島原松平本は「死人頭誦法華^{慈悲}」、書陵部本は「陸奥国平泉郡石塔事」、静嘉堂本では「慈悲大師、白骨女人授法花事」といった具合である。これからみても説話のタイトルは原作者の命名によるというより、書写階梯での任意の意向が反映していたものとみてよからう。

さて、説話(A)の部分で問題となるのは、傍線(イ)の「捌の里」と(ロ)の「さか芝山」とである。地名辞典の類をくってみても、平泉に「捌(ハツ)」という里はみあたらない。諸本では書陵部本に「柳(ヤツ)、慶安四年整版本は「柳」とする。

「陸奥郡郷考」(仙台叢書第二)によると「撰集抄」にも触れ、

「平泉郡。撰集抄^{西行記と} 卷一 大説^{白杜真法} 義於^於 今に平泉館の舊址を。柳

と云里にしばし住侍りし云々……今に平泉館の舊址を。柳の御所と稱すれば。柳は柳の字の誤にや」と誤写説をとり、慶安四年版本と一致する。確かに平泉に柳の御所はあるが、単純に誤写説に従ってよいものかどうか問題が残る。書陵部本の「柳(ヤツ)」も注意され、今のところ解決できない。

「さか芝山」に関して『大日本地名辞書』は「平泉志」を引用し、

「西行は、佐藤氏にて、平泉氏とも是同宗の人なり。而も、其平泉に遊びし事、東鑑に見え、又其時の歌、諸集に見えたり、柳の里は、一本に柳の里とせり、西行の柳清水の歌、緑ありて覚ゆ、又坂芝山は一説、五串村蓮花谷に逆芝山ありて、此処に慈覚大師の鬘髻を^{うづら}搦て建し塔あり、故に骨寺と号し、嘉祥年中、中尊寺に遷すと云へり、按に、平泉始め慈覚大師の開基、毛越寺ありて当初之をケゴシテラと呼し由の縁起あれば、後に清衡に至り、此骨寺及び僧坊をも平泉に遷して彼の高石に逆芝山の名を遺しゝなるべし」とも五串村蓮花谷にあり、後に高石に遷したとする。一方「平泉舊蹟志」(仙台叢書第二)は「一、高石。國衡屋敷に近し。是則撰集抄にもいはゆる。逆芝山にして。此高石は。其書に云へる石塔なりと云ふ。愚按するに撰集抄に云へる石塔は。里をはなれて十餘町山中に在りと云へり。此所山中にあらず。好事の者の附會なるべし。」と高石II

逆芝山を否定しているが、「平泉志」にいう五串村蓮花谷から移されたことには触れていない。

要するに「捌の里」といい「さか芝山」といい地理的には今一つ判然としないところがあるし、江戸期の地誌類の記述もそのまま鶴呑みにできない。ただ、この地名が作者の勝手な創作であると考えるには慎重を期す必要のあることだけを付言しておく。

三

次に(四)の部分であるが、某人の話が、この六話の中心となる。これを一読すると、もっと詳しい仏教説話としての伝承があり、それを「撰集抄」の作者が簡単に骨組だけを記しとどめていたとの感を受ける。しかも、所々に説話的な発想がすけてみえることからしても、単なる「撰集抄」作者の創作説話とは考えがたい。そのあたりを吟味してみよう。

傍線の「天井のうへに聲ありて」、床しき声で女に経を教えたとするが、この「天井」という場所は、当時の建物の空間のあり所として、不思議な物のやどる場所として、説話にもよく設定される。「古今著聞集」(巻十五、宿執)の「四九五、上杉僧死後法執に依りて鬼となる事」でも「山に、うへすぎ僧都といふ人ありけり。

法に執ふかくて、たやすく弟子などもさすげざりけり。死て後、住房の天井のうへに、おもき音なひして落かゝる物聞えけり」。誰かと聞くと、私は某で手のない鬼となつたと答える。「閑居友」(下巻三話)の「うらみふかき女いきながら鬼になる事」でも「火をつけ焼くほどに、なからほど焼くるに、天井より角五(つ)あるもの、

あかき雲、こしにまきたるが」鬼の姿となって走りおりてくる場面がある。また、小式部内侍が病重くなり、母を見て息の下から「イカニセムイクベキ方モヲボヘズ、ヲヤニサキダツ道ヲシラネバ」と詠すると「天井ニ感ズル聲アリテ」たちまちに病気が治癒したという。この小式部の話は「沙石集」(五下)「古今著聞集」(十訓抄)などにみえて著名である。

このように「天井」という空間をもつ場所は、説話の世界では、しばしば鬼や霊魂などのひそむ所として存在する。この点からみても「天井のうへに聲ありて」は注意される。

次に傍線(五)の、法花経を八日間にならぬ終えたということである。これは法花経八巻を毎日一巻ずつならつたことを暗示することまかい指示である。

(六)の説話で最も注目すべきは傍線(六)の部分であろう。白くされて苔のはえていた鬘髻が、舌だけ生きた人のごとくであったというのは、ひどく印象深いところであるが、説話文学には頻繁にあらわれ一つの系譜をもっている。

日本では古いところで「日本霊異記」(下巻第一話)に、永興禪師に師事していた誦経僧が、熊野山中で死んで骸骨となったが「永興復往きて、某の骨を取ら將として鬘髻を見れば、三年に至るも其舌腐ち不^{宛然}ニ生ニシテ有リ」とみえるのが類似する(この話は「今昔物語集」巻十二の三十一話にも)。同書には、この他、吉野金峰で修行の禪師が大乗経を誦する鬘髻に逢つてあり「久しきを歴て日に曝りたるも其の舌爛れ不^{宛然}して生きて著きて有リ」とみえる。また「大日本国法華経験記」には、^宅舎が紀伊国で白骨に逢う話があり「身体全く連りて、更に分散せず、青苔身を纏りて、多くの

年月を遙たり。觸體を見るに、その口の中に舌あり、赤く鮮かにして損せず」とあるが、この説話も「今昔物語集」卷十三の第十一話に同話があり、傍線部分は「骸ノ上ニ舌生テ、多ク年ヲ積タリト見エ。觸體ヲ見レバ口ノ中ニ舌有り。其ノ舌鮮ニシテ生タル人ノ如シ」とあり、「撰集抄」の描写に一番近い。

一方「今昔物語集」卷七の十四話では、并洲の東の看山で、土地を掘ると「人ノ上下ノ唇ノ似タリ。其ノ中ニ舌有り、鮮ニシテ紅赤ノ色也……」此レハ、法花経ヲ讀誦セル人ノ六根ノ不壞ザル事ヲ得タル唇舌也。法花経ヲ讀誦スル事干返三滿タル、其ノ靈驗ヲ顯セル也」とみえるが、この話の出典は「三宝感應要略録卷中六三」で、さらに原拠は梁高僧傳によるといふ。「法苑珠林第十八感應緣」には「出梁高僧傳」として「後魏范陽五侯寺僧、失其名、誦法華爲常業初死、権殮隄下、後改葬骸骨並枯、唯舌不壞、雍州有僧亦誦法華、隱白鹿山感一童子供給、及死、置屍巖下、余骸並枯、唯舌不朽矣。斎武陵世并東看山人堀見土黃白、又見一物状。如兩唇、其中有舌鮮紅色、以事聞奏帝問道俗……とみえ、遠く中国の書に類話を求めることができる。

以上、生前、法花経を熱心に誦していた僧が、死んだあとも舌だけは朽ちず、生きた人のままであった説話をひろってみたが、いずれも類型化した説話的発想であることが理解できよう。

さらに傍線(イ)で、山中に御経の声がした話も、先述した説話と相即するものとして諸々の説話集にみえる。長くなるので、一つ一つの紹介は略し、出典だけを示す。

・觸體が法花経を誦していた話。

。「大日本国法華経験記」第二十二話（「今昔物語集」卷十三の

十話に同話あり）

。「大日本国法華経験記」第六十四（「今昔物語集」卷十三の三十話、「拾遺往生伝」卷上、二十六話、「古今著聞集」卷十五に同話あり）

・墓所に法花経を誦す声のする話

。「大日本国法華経験記」第三十九話（「三外往生記」十五話に同話）

。「大日本国法華経験記」第四十二話（「拾遺往生伝」上卷六話、「古今著聞集」卷二の四十九話に同話）

このように頻出する。

(イ)の傍線(イ)で、觸體をすぐに「さか芝山」に送り帰せと命じているのも、千手院の広清法師が「一条より以北にある道場にて入滅せり。の墓所にして、毎夜に法花を誦する音あり。必ず一部を誦す一の弟子あり、その觸體を取りて清浄の山に置きぬ、その山の中にして、猶し法華を誦せり。」（「大日本国法華経験記」六十四話）と比較すると、「さか芝山」は清浄な山として設定されているようである。

以上のように「撰集抄」(イ)の説話は、仏教説話、特に法花経による女人往生譚として伝承されていたものの骨組をとり込んだものと推測できてる。

女がなぜ法花経をならいたがったかの理由は省略されているが、しかし、この女が「猛將」の娘として紹介してあること、また、筆者自身、この里を「殺生鬪諍のさかりなる里」としてあることから勘案すると、常日頃、父や里人たちの殺生や鬪争を見聞してきた女が、そこに罪の意識を感じて、法花経の説誦を必死に願ったのでは

ないかと臆測されてくる。

このようにたどつてくると、(B)の原話は、

陸奥国平泉郡捌の里に一人の猛将の女があった。この女は父や里人たちの常日頃の殺生鬪闘を歎き、無常を感じ、常に法花經の誦誦による功德を願つていた。

ある時、天井からゆかしき声があり、教典の教示を受け、毎日一卷ずつ習つて、八日間で誦了した。不思議に思つて女が天井を見上げると、白くされて苦むした鬪闘があり、その舌だけが生きた人のごとく赤かった。そして鬪闘は、自分が慈恵大師であることを告げ、早く、もとのさか芝山へおさめてくれと依頼する。女はその白骨を言われたように山に納め、自分もそのまま出家して庵室を結び、日夜、法花經を誦して最後には見事に往生をとげた。

原話を今仮りにこのように想定すると、ここで強調されているのは、まず第一に法花經の功德であろう。その誦誦によつて女は往生をとげたのである。その点「大日本国法華經驗記」などの説話と系列が等しい。第二には、女が殺生鬪闘をみて、法花經の誦誦を願ひ、かつそれと同時に出家したこと。発心への讃嘆である。第三は女人往生への賞美であつたらう。

こういつた性格を具有すると思われる原話を、「撰集抄」がどのように受けとめたかをたどることが、次に残された問題であるが、それに先だつて、検討しておかなければならない問題がある。

それは「撰集抄」で、白骨の主は慈恵大師としているものが、先引した「陸奥郡郷考」「平泉志」がともに慈覚大師としている点である。特に「陸奥郡郷考」は「撰集抄」によりながら慈覚大師とし

ている。が、現存諸本には慈覚大師としたもののみでない。(注8)「陸奥郡郷考」などの単なる誤写、誤認であろうか。

私は、これは単純な誤写ではなく「撰集抄」で慈恵大師とあるものを、意識的に慈覚大師に変える伝承的基盤があつたとみたい。

「三代実録」「日本往生極樂記」「大日本国法華經驗記」「慈覚大師伝」(統類從三)などによつて、簡単に慈覚大師の経歴を紹介してみると、彼は延暦寺四仁と称し、壬生氏で下野国都賀郡の人大同三年出家して伝教大師に師事し、承和二年に入唐、承和十四年帰朝、貞観六年、七十一歳で入滅している。説話類をみると、慈覚大師は法花經と密接な関連をもつて登場する。例えば「大日本国法華經驗記」(巻上の四話)には、九才にして法花經の普門品を探り得て、それ以降、法花經を誦誦し、広く経論を学んだこと、さらに、石の墨、草の筆をもつて法花經を書写したり、上野、下野におもむき、二千部の妙法花經を書写供養したと伝える。「今昔物語集」(巻十一の廿七話)によると、慈覚大師は「此の山ニ大ナル椋有り。其木ノ空ニ在ンテ如法ニ精神シテ、法花經ヲ書給テ」ともあり、常に法花經と不離の關係にある。

これに対して、慈恵大師は、「後拾遺往生伝」「慈恵大僧正伝」(類從六九)などによると、近江国浅井郡岳本郷の人で、俗姓木津氏。延喜十二年生(九一二)で、十二歳で叡山に登り、理仙に師事し、康保三年に天台座主、天元四年大僧正、寛和元年(九八五)正月三日、七十四歳で入滅している。慈覚大師より百年余り後の人である。彼が法花經との関連で説話に登場することは少ない。してみると、(B)の部分の説話としては、慈覚大師の方がはるかにふさわしいわけである。

だから原話が慈覚大師であったか慈恵大師であったかは軽率に判断できないところがあり、平泉の地方では、慈覚大師の説話として伝承してきた可能性もある。

ただ、「撰集抄」では慈恵大師として受けとめていたことは確かである。「撰集抄」では慈覚大師の登場は一度もないのに対し、慈恵大師は冒頭の巻一の第一話（増賀上人之事）をはじめ、巻五の第三話（内記入道保胤慈悲深事）、巻六の第十話（性空上人発心并遊女拜事）を含め四回も顔をだす。この点は「撰集抄」成立時と慈恵大師信仰との関係もあるろう。

四

いささか脇道にそれたが、ここで改めて、先に想定した(㉑)の説話の原話の特徴を「撰集抄」がどのように受けとめているか吟味してみよう。

まず、原話では法花経の功德が強調されていたが、「撰集抄」では、その方面を強調し、発展させる方には進んでいない。これは、なにもこの話に限ったことではなく「撰集抄」では他にも法花経のでてくる話、二話（巻六の第十話と巻六の第十一話）でも、経の力をたたえることに中心テーマをおいていないことも軌を一にする。また、原話にあったであろう、女の無常、発心の過程にも筆を向けず、「発心集」のように、その発心の動機や過程に着目しない。さらに、女人往生ということにも主眼をおいていない。

以上のように「撰集抄」は、(㉑)の説話の原話に内包されていた主題をそのまま受継することなく、別の方向に転化させている。それ

が(㉑)以下の説話評論である。

(㉑)では、刃土の地にあつて、しかも女の身を誂誂せんとした「心の中の貴さ」に感嘆している。それは経の功德や往生への讃嘆そのものではなく、女の精神、生きさまへの讚美となっている。

(㉒)の部分、これは「閑居友」下巻五話の次の傍線部分をほぼそのまま引用している。

げに、あはれに侍ける御めぐみのふかさかな。すべて観音のあはれみは、ことにたぐひをいでて侍にや。唐土に侍し時、きく侍しは、おろかなる男の一人侍けるが、法花をよまむとするに、えかなはず侍ければ、いみじくかたちよき女のいづくよりとなくきたりて、妻となりてそひめてねんごろに教へて、一部おはりて後、観音のかたちにはあらはれて、うせ給へる事ありけり。かやうにありがたき御あはれみを思ふに、そごろにたのもの。相対的に見て、「閑居友」と「撰集抄」とは近しい説話の受けとめかたをする。

さらに(㉒)の部分には、この説話を受けとめる作者の姿勢があらわに示されており、この女を「さまかへて思ひすまして侍りけん、ごとくにうらやましくも侍り」と内心を披瀝し、女のいさぎよい生きさまに羨望の念を抱くとともに「われらがなまじひに家を出でて、衣はそめぬれど、はかしくしき信心をおこさず、み山に思ひすます事もなくて、年のいたづらにたけぬる、そごろに悲しく侍り」とふがいない自己の遁世生活を厳しく反省するにいたっている。そして、(㉒)ではこの土地の衆生が信仰に目覚めないことを歎く。

このように「撰集抄」は、(㉒)の説話の原話が示したような主題ではなく、あくまで、女の生きさまを、現在の出家遁世している自分

と比較し、自省するように受けとめている。

この傾向は「撰集抄」の他の説話の多くに底流する傾向であり、西行に仮託されたところの、当時の通世歌人や隠栖の文人層の理想的な生きざまの追求を行っているのとみてとれるのである。

そのような目は、現世における生活環境にも異常な関心を示すことになり、六話の話でも「さか芝山」の景を「木の生ひたる有椏岩のすがた、水の流れたる體、繪にかくとも筆もおよびがたき程に見え侍り。」とか、女の庵室を尋ね「口三間なる屋の、かみさびてかたばかり残りしかば、かきくらするゝ心地して」と詳細に描写することを忘れてしまふ。

おわりに

「撰集抄」巻二の第六話をとりあげ、そこに紹介されている(B)の説話が、単なる作者の創作説話ではなく、伝承をともなつた原話があったであろうと推測し、種々の視点からその原話の想定や説話的発想をおさえてきた。

そして、その説話を「撰集抄」が、どのように受けとめているかを検討してみたが、「撰集抄」は原話の主題であつたと思われ、法花経の功德や女人往生のことにはあまり関心を示さず、ひたすら、出家通世した女のすばらしい生きざまに感動し、さらに作者の現在の生きざまの不徹底を自省する方向で受けとめていることがわかつた。こういう受けとめかたは、「撰集抄」全体の大方の傾向とも重なるものである。

「撰集抄」の内質を把握するには、仏教説話集という大きな枠組

だけでとらえるのではなく、微細に一つ一つの話を腑分けしてみる研究の必要性のあることを、説話研究の一環として提示してみた。

——岡山大学助教授——

(注1) 「説話の成長―撰集抄における隨筆的発想―」(国語と国文学、昭二九・十)。

(注2) 「撰集抄における通世思想」(『隠遁の文学』所収)。

(注3) 「『撰集抄』形成私論」(国語と国文学、昭五二・五)、「撰集抄の方法覚え書」(実践国文学、昭五二・二十)、「『撰集抄』の形成私論(一)―巻八を中心に―」(実践大学紀要、昭五三・三)。

(注4) 「『撰集抄』形成論のための一考察―説話を素材とした物語的説話―」(国語と国文学、昭五三・十二)。

(注5) 平井卓郎「撰集抄試論」(国語と国文学、昭一六・十)は、略本は広本より原形に近いとし、今野達氏「撰集抄の成立について―その年次と性格―」(国語国文、昭三一・十二)は、広本が略本に先行するといふ。

(注6) 風巻景次郎・窪田章一郎各氏の説。

(注7) 安田孝子他「撰集抄校本篇」による。以下同じ。

(注8) (注7)に同じ。